

## 中国電影大観



# 狩り場の掟 (獵場札撒 / ON THE HUNTING GROUND)

2007(平成19)年11月3日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)

監督=田 壮 壮 / 出演=敖特銀巴雅 / 拉西 / 巴彦爾口 / 色旺道爾吉 (徳間書店配給 / 1985年中国映画 / 83分)

……ここんとこ、いろいろと縁のある(?)中国第5世代の田 壮 壮 ティエン・チュアンチュアン 監督の1作目を遂に鑑賞! 狩り場のシーンの生々しい迫力にはビックリだが、「狩り場の掟」の中で生きるモンゴル人たちの人間関係は複雑で、私たち日本人にはわかりにくい。しかし、田 壮 壮 ティエン・チュアンチュアン 監督の主張の明確性は1作目から……。ところで、この1作目と最新作『吳清源 極みの棋譜』の間の22年間における彼の変化は……?

## なぜか、ここんとこ、田 壮 壮 ティエン・チュアンチュアン 監督とご縁が……?

私が田 壮 壮 ティエン・チュアンチュアン 監督の最新作『吳清源 極みの棋譜』(06年)を観たのが9月25日。約1カ月後の11月3日、シネ・ヌーヴォで開催されている「中国映画の全貌2007」で1985年の彼の監督デビュー作を観ることに。

さらに特筆すれば、私が北京電影学院内の喫茶室で田 壮 壮 ティエン・チュアンチュアン 監督と並んでツーショットの写真を撮ったのが去る10月9日。また来る11月24日(土)には、シネマート心齋橋で行われる『吳清源 極みの棋譜』の「上映会」で、今は政界を引退した「塩じい」こと塩川正十郎氏と対談をやることになっている。このように、ここんとこ私は、田 壮 壮 ティエン・チュアンチュアン 監督とは何かにつけてご縁がある……?

## 2作目よりは1作目の方が……?

私は3年前の2004年6月20日に「中国映画の全貌2004」で田 壮 壮 ティエン・チュアンチュアン 監督の監督2作目の『盜馬賊』(85年)を観たが、その評価は低く、星2つだった。それは、

チベット族の儀式や風俗をドキュメンタリータッチで描いたこの映画はそれなりに興味深いものの、「あなるほど、と思う程度のもの」であり、「やはり映画には、ストーリーがなくなっちゃ……！」と思ったため（『シネマルーム5』67頁参照）。

ティエン・チュアンチュアン  
田 壮 壮監督の1作目も、そのタイトルどおりドキュメンタリータッチのもので、1985年当時のモンゴル族の「狩り場の掟」を描いたもの。チンギス・ハンが13世紀にモンゴル族に対して定めたとされる「狩り場の掟」の厳しさとその掟の中で悩み葛藤する男たちの姿は、2作目よりはよく理解できる。したがって私には、2作目よりもこの1作目の方が……。

ちなみに、チンギス・ハンの掟とは、①獲物は最初にかみついた猟犬の飼い主のもの、②狩猟禁止動物は獲るな、③最初の獲物は〇〇にプレゼントというシンプルなものの。

## チェン・カイコー 陳 凱 歌、チャン・イーモウ 張 藝 謀、ティエン・チュアンチュアン 田 壮 壮の出世競争は……？

1978年に再開された北京電影学院の第1期生としてチェン・カイコー 陳 凱 歌、チャン・イーモウ 張 藝 謀らと共に入学し、1982年に同学院を卒業した後、北京映画製作所に配属されたティエン・チュアンチュアン 田 壮 壮は、1984年にチェン・カイコー 陳 凱 歌が『黄色い大地』で監督デビューした翌年の1985年、『狩り場の掟』で監督デビューした。しかし、『黄色い大地』が1985年にロカルノ国際映画祭で銀豹賞を受賞するなどいきなり全世界的な注目を浴びたことに比べれば、その差は歴然。さらに少し遅れて1987年に『紅いコーリャン』でデビューしたチャン・イーモウ 張 藝 謀の処女作も、1988年の第38回ベルリン国際映画祭でグランプリ（金熊賞）を受賞するなど、ものすごい反響を呼んだ。このようにティエン・チュアンチュアン 田 壮 壮監督はチャン・イーモウ 張 藝 謀監督にも大きく遅れを……。

## 石子順氏の評価は……？

1作目の『狩り場の掟』と2作目の『盗馬賊』でモンゴル、チベットと少数民族の苦難の生きざまを描いたティエン・チュアンチュアン 田 壮 壮監督は、石子順氏によれば、「『若手最高の監督』と注目されたが、プリントは売れなかった」らしい（石子順著『中国映画の明星女優篇』90頁参照）。またそれは、「画面、色彩は最高だが物語性に乏しくて難解だった。ティエン・チュアンチュアン 田 壮 壮の野性味ある演出力は評価されたが中国の映画観客むきではなかった」ためとのこと（同書90～91頁参照）。したがって、最初の出世競争で

ティエン・チュアンチュアン 田 壮 壮監督は、チェン・カイコー 陳 凱 歌、チャン・イーモウ 張 藝 謀監督に大きく出遅れたが……。

## 水野衛子と中井貴一

私は、10月15日に中井貴一がプロデュース兼主演した『鳳凰 わが愛』（07年）を観た後、もう少し勉強したくなり、中国の新疆ウイグル地区で撮影された映画『ヘブン・アンド・アース』（03年）の4カ月にわたる撮影期間の生活を笑い、怒り、涙で綴った中井貴一著の『日記 「ヘブン・アンド・アース」 中国滞在録』（2004年・キネマ旬報社刊）を購入した。そしてそれをパラパラと読んだところ、俳優中井貴一の通訳として登場し、3カ月間（の予定で）生活を共にしたのが水野衛子さんとのこと。不安いっぱい『ヘブン・アンド・アース』の撮影に臨んだ中井貴一が、彼女に「切り札としてご登場いただいた」経緯については、同書の「9月8日 暮らしの生命線を握る通訳の水野衛子さん登場」という項を読めば明らかだ（58～62頁参照）。水野衛子さんの「本業は翻訳家であり、日本で公開される中国映画の字幕の多くは、彼女が手がけている」（同書61頁参照）わけだから、まさに彼女は「名作のセリフで学ぶ中国語」の執筆者として最適。

## 水野衛子氏は面白い評論を……

私が2005年5月からずっと愛読しているのが、『人民中国』に連載されている水野衛子氏の「名作のセリフで学ぶ中国語」。その2007年10月号がティエン・チュアンチュアン田 壮 壮監督の『呉清源 極みの棋譜』を取りあげていたため、彼女の面白い評価、解説を読むことができた。

それは、『呉清源 極みの棋譜』について、チェン・カイコー 陳 凱 歌、チャン・イーモウ 張 藝 謀と対比して次のように書いているところ。すなわち、「ティエン・チュアンチュアン田 壮 壮は『春の惑い』以来、かつての盟友でありライバルであるチャン・イーモウ張 藝 謀やチェン・カイコー陳 凱 歌とは逆の枯淡の境地を突き進むかのようで、若い頃、やんちゃだった男ほど中年を過ぎたばかりで早くも枯れるものなのかなあ、と興味深いものがある」というものだ（『人民中国』2007年10月号74頁参照）。

10月9日に北京電影学院で記念撮影した時の感じでは、今年55歳のティエン・チュアンチュアン田 壮 壮監督はまだ若々しく「枯れた」という印象は全くなかったが、『呉清源 極みの棋譜』の作風はたしかに水野衛子さん指摘のとおりのもの。しかし、その22年前の『狩り場の掟』の作風は……？

## 冒頭とラストに年に1度の村を挙げての「狩り」のシーンが

中国の陳凱歌チェン・カイコーや田壯壯ティエン・チュアンチュアンなど第5世代監督は自分自身「下放」された体験をもっているし、『胡同のひまわり』(05年)の張楊チャン・ヤンなどの第6世代監督は、下放された父親の下で幼少期や少年時代を過ごした経験をもっている。

ところで、1952年生まれの田壯壯ティエン・チュアンチュアン監督が下放されたのは内モンゴルとのこと。したがって、北京電影学院を卒業した後北京映画製作所に配属され、「自由に映画をつくっていいよ」という環境に置かれた時(?)、彼が何よりもまずカメラに収めたかったのが、下放時代に過ごした内モンゴルにおける少数民族たちの「狩り」をテーマにした生活の実態だったのかも……? そのため彼の監督デビュー作である『狩り場の掟』では、冒頭とラストに年に1度の村を挙げての「狩り」のシーンが……。

## あっと驚く狩りのシーンが次々と

この映画の狩りのシーンの生々しさは他の追従を許さないもの。鉄砲の弾に撃たれて手足を痙攣させながら死んでいく鹿の姿や、猟犬に追い回されついに捕まってしまう小動物たちの姿が次々と登場するから、今ドキの動物愛護団体のメンバーが観れば、ひょっとして苦情が……? しかし、こんな狩り場の風景は、あの時代のモンゴルにおいては当然のこと。そんな狩りの必要性、というよりも生活の一部として根づいている狩りに対しては、誰もどんな視点からも苦情を申し立てることなどできないはず……。

## 狩り場の人間関係 その1

この映画はドキュメンタリータッチだが、決してドキュメンタリー映画ではない。それは、狩りをテーマとして浮かびあがる人間関係の妙を面白く(?)描いているから。

まず冒頭の狩りのシーンでは、A村の男たちは右翼から、B村の男たちは左翼から獲物を追うことになる。そしてA村のリーダーはA'、B村のリーダーはB'。そんな中で登場するのが、掟を破り他人の獲物を盗んだ男。彼に対する村人たちの対応は?

それは、家の前にある馬をくくりつける柱に鹿の生首をうちすえ、村長の命令によ

ってその前で一夜懺悔をさせられるもの。もちろん掟破りは悪いに決まっているが、そんな行動を命じられた男の対応は……？

## 狩り場の人間関係 その2

狩り場の人間関係といえども同じ人間同士だから人間臭い面があるのは当然。スクリーン上には、掟破りで処罰された男の兄が村長を逆恨みし、村長の羊を狼に襲わせるという人間臭いシーンが登場する。さらに、狼にとり囲まれてヤバイ状態に陥っている男を救助に向かう男の姿も登場する。

もっとも、この映画はもともとセリフが極端に少ないうえ、私たち日本人には誰が誰だか容易に見分けがつかないから、ストーリー展開を正確に把握することはかなり難しい。しかし、「狩り」の中で生きる男たちの実力社会の姿を実感することは十分できるはず……。

## ラストシーンをどう解釈……？

映画はその後もさまざまな人間臭いシーンを展開させながらフィナーレに向かうが、そのフィナーレは、多くの村人たちが鹿の生首の前で懺悔しているシーン。さて、このラストシーンをどう解釈すればいいのだろうか……？

2007(平成19)年11月8日記